

家永真幸著

『国宝の政治史——「中国」の
故宮とパンダ——』

東京大学出版会 2017年 ix + 310 + 27ページ

ふか くし とおる
深 串 徹

あるモノを「国宝」と位置づけることは、境界線を引く行為でもある。それは、そのモノに他とは隔絶した高い価値が存在すると認定し、さらには、それを宝としたのは「我々」であり、他の誰でもないことを明示することだからである。近代の政治が、地球上の空間や人々の集団のなかに境界線を画し、その内側と外側を区別することによって支えられてきたことを考えれば、「国宝」を創造することもまた、すぐれて政治的な行為に他ならない。

本書は、中華民国という国家によって「中国」の「国宝」が形成された過程と、それらの政治利用の歴史について検討したものである。これらの探究を通じて、「国宝」を「国宝」たらしめる政治力学を剔出し、「中国」の領土や国民の境界線がいかに創出・可視化され、あるいは国家の「分断」が隠蔽・不可視化されてきたかを解明するのが、本書の目的である。

以下、本書の概要と評価を記したい。

I 概要

本書は、序章、第Ⅰ部（第1～4章）、第Ⅱ部（第5～7章）、および終章から成る。序章では、事例の選択と分析視角について説明される。「国宝」の事例として選ばれるのは、故宮文物とパンダである。いずれも、美術館や動物園といった広義の「ミュージアム」の管理下に置かれるコレクションであると同時に、「中国」を自称する国家の主権と、国民統合をめぐる政治に密接に関わってきたという特徴を持つ。

本書では、故宮文物とパンダの意義づけに関わる政治的言説の変遷が、2つの視角を手がかりにして検討される。そのひとつは、「文化触変」である。これは、ひとつのシステムとして安定している文化に

外来の文化要素が伝播した時に起こる変化をモデル化したものである。故宮文物とパンダは、これまで2度の文化触変に巻き込まれてきたとされる。1度目は、後述する「ミュージアム」の概念が近代中国に伝来した時。2度目は、台湾において中華民国文化の公的な位置づけが挑戦を受けるようになった時であるという。

分析視角のもうひとつは、西洋史家の松宮秀治が提唱した「ミュージアムの思想」[松宮 2003] である。本書の要約によれば、西欧に起源を持つ「ミュージアム」は、森羅万象を近代国民国家における国民の教養財産として整序し公開するという「公開性の原則」と、収蔵物を経済活動の流通回路から隔離して保護下に置くという「保護の思想」によって特徴づけられる。この議論を援用して、故宮文物とパンダの公開・保護の目的や、内実の変遷が着目される。

以上をふまえて、第Ⅰ部は、19世紀後半以降の西洋文化との接触を経て、故宮文物とパンダが中国を象徴する政治的役割を帯びていった経緯が跡づけられる。第1章では、前史として、清末期の中国における「ミュージアム」概念の受容過程が検討される。“Museum”の訳語である「博物館」や「博物院」という語は、1840年代には漢籍に登場した。だが、清朝の時代、「公開性の原則」や「保護の思想」を備えた博物館が建設されることは、ついになかった。

第2章では、1925年に北京で故宮博物院が建設された経緯が論じられる。清末民初期に文化財の破壊・流出が多発したことを背景として、古物は国家が博物館に収蔵して保護すべきであるとの思想が形成されていった。中華民国が成立すると、清朝皇室のコレクションである古物を収蔵・展示する故宮博物院が設立された。コレクションは、国民の共有財産という新たな地位が付与されると共に、博物館に収蔵されることで、美術市場から隔絶される。

第3章では、北京の故宮博物院、および南京の国立中央博物院収蔵の文物が「国宝」という地位を確立していく過程が検討される。故宮博物院収蔵品を中心とした古物のイギリス出展によって、それらは金銭に換算できない「国宝」であるとの位置づけが定着する。国立中央博物院においても、一部の収蔵品は「国宝」との評価を得ていた。2つの博物院の収蔵品は、国共内戦の勃発後に台湾へ移送され、台北の故宮文物を構成することになる。

第4章では、パンダが中国を象徴する動物としての地位を付与されるに至る経緯がたどられる。国内ではほとんど知られていなかったパンダは、19世紀の欧米人によってその存在と魅力が「発見」された。日中戦争が勃発すると中華民国政府は、米中友好関係を演出し、自国が欧米流の動物保護思想を共有する文明国であることを示すため、アメリカにひとつがいのパンダを贈呈した。これが、いわゆる「パンダ外交」の嚆矢となる。

続く第Ⅱ部では、国共内戦の結果台湾に持ち込まれた故宫文物、および中国大陆に残されたパンダが、「中国」の境界線をめぐる問題のなかでいかなる争点を形成したかが考察される。第5章では、中華民国の台湾移転後から、兩岸関係が転機を迎えた1970年代初頭までの間における故宫文物の政治的位置づけに焦点が合わされる。中華民国政府は、自らを「中国」の文化遺産の保護者として印象づけるべく、故宫文物の海外出展を実施し、文物を収蔵・展示するための「台北故宫」を開館させた。国家のシンボルの正統な保護者の座をめぐって、台湾海峡兩岸の政府は角逐を繰り返したが、こうした争いを本書は、国際冷戦体制下における分断国家問題の「文化内戦」化と名づける。

第6章では、中華民国が先鞭をつけた「パンダ外交」が、いかに継承されたかが検討される。建国後間もなくパンダの重要性を認識した共産党政権は、中華人民共和国を政府承認するという条件を満たした国家に限って、パンダを贈呈した。中華人民共和国がワシントン条約に加盟して希少動物の国際取引が禁止されると、1980年代頃からパンダは「国宝」とよばれるようになる。外国への贈呈が停止されたことにより、パンダを移動させることは、「中国」の「国内」が及ぶ範囲を象徴する行為にもなったのである。

第7章では、1970年代以降の台湾における故宫文物とパンダの政治的位置づけの変遷が描かれる。兩岸関係が進展すると、故宫を含めた博物館同士の交流も開始された。それは、台湾の政権が大陸中国の政権を、自らと並ぶ「中華文化」の担い手として承認したことを意味していた。他方で、2000年に民進党政権が発足すると、「中華文化」の精髓を収蔵した博物館という台北故宫の性格を希釈化することも模索される。パンダについては、80年代の台湾では大

陸中国と同様に、それを「国宝」と呼称する言説が存在した。だが、2005年にパンダ贈呈計画が持ち上がった際には、パンダの來台が「国内移動」と「国際移動」のどちらにあたるかという、台湾の本土化を背景とした新たな争点が浮上する。

終章では、これまでの議論がまとめられる。故宫文物とパンダは、いずれも中華民国がそれらの「国内」からの流出を問題視したことで、「国家のコレクション」に編入された。1949年以降、それらは「唯一の合法中国」をめぐる闘争に使用され、また、「国内」がどこまでの範囲を含むかを演出するためにも利用された。2つの「国宝」には、移動することで「国境」の存否をめぐる政治争点を生み出すという共通した歴史的 성격が存在したのである。以上をふまえて、序章で提起された問題に対する回答は次のようになる。すなわち、「遠い場所にある古い美術品の破壊や、動物の絶滅を心苦しき思い、人類の制御下に置きたいと願う、その価値観こそが、ある国家があるモノを排他的に管理することを正当化し、そのモノの移動が国境を越えたか否かを政治問題化してきた」(303ページ)。「国宝」を「国宝」たらしめてきた力学とは、このような価値観であると結論づけられている。

Ⅱ 評 価

本書の第1の意義は、中国において公共のコレクションが成立する歴史を体系的に描き出したことである。故宫文物にしてもパンダにしても、それぞれを個別に論じた歴史研究は、すでに多く存在する(林2002; 呉2003; 張2012; ニコルズ2014など)。だが、それらのモノに公共物として保護されつつ公開されるという共通の要素が存在することを見出し、制度としての「ミュージアム」が中国で受容され、運営されるようになる過程を詳細に跡づけた点に本書の特徴がある。

「ミュージアム」の研究は、大きく2種類に分けられる。ひとつは、「ミュージアム」を施設としてとらえ、その運営や規範などについて検討するもので、博物館学とよばれる分野に相当する。もうひとつは、「ミュージアム」を一種のメディアととらえ、そこに書き込まれた政治的・社会的・文化的な意味を探るものである。近代という時代に適応しようと模索す

る中国の姿を、公共コレクションの制度化を通じて検討した本書は、後者の系譜に属すると言えるだろう。コレクションの一部を「国宝」と位置づけ、国家のシンボルとしての意味を付与してきたという本書が描き出した歴史は、「中国人」がいかなる自画像を描こうと取り組んできたか、その試行錯誤の歴史でもある。

本書のもうひとつの意義は、中国の「国宝」が「移動」という現象と密接に関係してきたことを明らかにしたことである。博物館や美術館に安置されている風景を連想すれば、一般的に「国宝」が我々に与える印象は、静的なものであろう。しかし本書は、あるモノが「国宝」の地位を獲得するに至る過程で、その国外流出に対する危機意識が存在したことや、引かれるべき国境線の位置を象徴するイベントとしてそのモノが動かされてきたという事実を掘り起こすことによって、中国の「国宝」がその形成から政治利用に至るまで、常に大規模な「移動」と深い関係にあったことを浮き彫りにした。この点がどれほど中国に特徴的な現象であるかは今後の比較研究が待たれるだろうが、本書が分析期間を長く設定し、複数の事例を選択することで、中国の文化史の興味深い一面に光を当てた功績は大きいと言える。

他方で、本書に課題がないわけでもない。第1に、『国宝の政治史』との表題から考えるならば、「国宝」という概念の成立史にもより多くの紙幅が割かれるべきだったのではないだろうか。確かに、故宫文物やパンダが「国宝」と呼称されるようになった経緯は、本書で明らかにされている。だが、元来は貨幣の意味で用いられていたこの単語がいかにして国家を象徴する宝物という意味を獲得していったかについては、日本から影響を受けた可能性が示唆されるにとどまっている（98～99ページ）。西欧では本書の「国宝」に相当する概念が一般的ではないだけに、仮に日本から影響を受けたのであれば、その文化触変の過程もまた重要な論点であったはずである。中国と日本の間で、「国宝」概念に異同はあったのだろうか。また、時代ごとに「国宝」の社会的意味が変化した可能性はないのだろうか。

第2に、中国における「ミュージアム」と西欧のそれとの間に存在する差異についても、掘り下げた説明が必要であったと思われる。中国の「ミュージアム」が、「公開性の原則」と「保護の思想」という

普遍的な要素を備えるに至った経緯は、本書で描かれているとおりであろう。しかし、例えば故宫博物院は、大英博物館やルーブル美術館のように世界中から収蔵品を蒐集するのではなく、中華文物の収蔵をメインとすることで、国家の正統性を象徴してきた。中国と西欧における国家級の「ミュージアム」は、なぜこのように性格を異にするようになったのであろうか。

これらの問題が本書の議論の射程外に置かれた一因は、分析視角のひとつである「ミュージアムの思想」にあると考えられる。元々、松宮が提唱した「ミュージアムの思想」とは、西欧近代の創出した諸価値に基づいて、世界を一元的な「世界システム」に組み込もうとする傾向を有した思想であり、その攻撃性と暴力性を指摘するのが、彼の議論の骨子であった。本書はこの議論を敷衍して、「ある特定のモノを国家級のミュージアムに収蔵することは、あらゆる自然物・人工物を人間のコントロール下で維持することを目指す西洋近代的な『国際社会の価値観』への恭順を示す意味を持ちうる」（12ページ）としている。いずれにせよ、「ミュージアム」には普遍性への志向が存在することが、あらかじめ措定されている。

中国における古物や動物の取り扱い方に、「国際社会の価値観」への恭順姿勢が看取できることは間違いない。だが、そうした面を強調することは、中国が「ミュージアム」に対して独自の意味を付与した可能性を捨象することにもなる。「国宝」概念の成立や、故宫博物院の文化的単一性といった中国に特徴的な要素に関する本書の言及が少ないのは、以上の理由によると考えられるのである。

第3に、第2の点とも関連するが、本書の議論の一部にはやや過度な一般化も見られる。例えば、「ある国家の中央政府が何をミュージアムの収蔵とするかは、その主権が及ぶ範囲はどこまでなのかという問題と直接的に関わる」（12ページ）という指摘は、先述したように西欧の「ミュージアム」でも普遍的に見られる傾向とは言い難い。同じように、終章で「美術品や動植物に対する『正しい』態度をとろうとすることは、世界の他の地域であっても、国境紛争にも容易に結びつきうる」と推論される（303ページ）と述べられていることも、兩岸関係の状況に強く影響を受けた議論であるだろう。また、結論

で示された「国宝」を「国宝」たらしめる力学も、故宮文物やパンダが「国宝」化した説明として説得的ではあるが、博物館や動物園の収蔵物のうち、「国宝」にならないモノも存在する理由を十分に説明できてはいないように思われる。

最後に、パンダ外交の継承について論じた第6章について触れておきたい。同章のタイトルは「文化内戦の脱冷戦化と国際レジーム化」であるが、本文では「文化内戦」が冷戦と交錯した過程について明らかにされているものの、脱冷戦化とどのように関連したかは必ずしも判然としない。また、このタイトルからは内戦が国際レジームに昇華したかのような印象を受けるが、実際に描かれているのは「文化内戦」が国際レジームから新たな規定を受けるようになったプロセスであり、因果の方向性が逆である。これらを考え合わせると、第6章の表題は、より本文の内容に即したものがつけられるべきであっただろう。

以上のような留保をつけながらも、本書が中国の近現代史を通覧する視座を提示し、また、国際関係論、思想史、文化史など、多様な学問分野への貢献を視野に収めた労作であることは疑いない。今後、本書をもとにして、「国宝」が国民統合に果たす役割や、「国宝」・「ミュージアム」概念の国際比較など、

さらに発展的な研究が行われていくことが期待される。そうした研究の進展は、境界線で画された複数の主権国家から構成される国際社会についての新たな知見を我々に提供してくれるであろう。

文献リスト

〈日本語文献〉

張碧恵 2012.「中華民国と文物事業——国民国家建設における文物の意味——」早稲田大学大学院アジア太平洋研究科博士論文.

ニコルズ, ヘンリー 2014.『パンダが来た道——人と歩んだ150年——』遠藤秀紀監修・池村千秋訳 白水社.

松宮秀治 2003.『ミュージアムの思想』白水社.

〈中国語文献〉

呉淑瑛 2003.「展覧中の『中国』——以1961年中国古芸術品赴美展覽為例——」国立政治大学歴史学系碩士論文.

林伯欣 2002.「『国宝』之旅——災難記憶、帝国想像、與故宮博物院——」『中外文学』30(9) 227-264.

(立教大学アジア地域研究所特任研究員)